平成二十九年四月十日発行
皇學館論叢第五十巻第二号　抜刷

外交講座　伊勢志摩サミットについて

森　和　也

皇學館論叢　第五十巻第二号
平成二十九年四月十日

外交講座　伊勢志摩サミットについて

森　和也

（木村徳宏）　それでは本日ご講演いただきます先生の紹介を人文學會委員長の岡田登先生からお願い申し上げます。

（岡田　登）　こんにちは。この五月の二十六・二十七日に伊勢志摩サミットが開かれました。世界の元首七名の方が伊勢・志摩の方に来られまして、その事務局を担当されました外務省の森和也先生に今日は伊勢志摩サミットに関連して話をしていただきます。森先生につきまして、少し履歴を紹介させていただきたいと思います。私たちはあまり外務省の方と付き合う機会も御座いませんし、よく理解できていない部分もありますので、先生のことを、少し略歴を追いながら紹介させていただきたいと思います。

先生は昭和四十八年に大阪でお生まれになりまして、京都大学の法学部を卒業されております。平成六年に外務公務員採用一種試験に合格されまして、平成七年に外務省に入省されております。あと経済局国際経済第二課課長補佐、大臣政務官室課長補佐、経済協力局有償資金協力課課長補佐、総合外交政策局国連政策課課長補佐、経済局経済連携課首席事務官、経済局経済連携課経済連携協定交渉官、在ロシア日本国大使館参事官、在英国日本国大使館参事官、内閣官

房副長官補付企画官、経済局サービス貿易室企画官、そして平成二十七年でありますが、伊勢志摩サミット準備事務局次長ということで、現在は第六回アフリカ開発会議事務局次長を任じられておられます。

今ご紹介しましたこの履歴には平仮名は一つもありません。全て漢字で記されておりますので、極めて堅い御役所のように思いますが、今日は非常に柔らかい話をしていただけるのではないかと思っております。また、この講演のあとには、皆さんからの積極的な御質問にもお答えしていただけるようですので、皆さんまた、なかなか普段聞き慣れない部分が多いと思いますので、どうぞ宜しくお願いしたいと思います。先生どうぞ宜しくお願い致します。

一

ただいまご紹介にあずかりました、前外務省伊勢志摩サミット準備事務局次長の森でございます。現在は、今ご紹介ありましたように早速次のポストに移っておりまして、アフリカ開発会議、ＴＩＣＡＤと我々呼んでおりますけれども、それが来月下旬にケニアのナイロビで開催されるということで、伊勢志摩からいきなりケニアへと。先ほどご紹介いただきましたように、これまで担当したことが殆どダブっていないのです。経済連携だけ三度ほどやらせていただきましたが、それ以外バラバラで、外務省は今八階建てですが、そのほぼ全部の階で働いたことがあるぐらいでして、いかに外務省が扱っている分野・仕事が広いかという証左でもあろうかと思います。

去年の九月一日にサミットの次長を拝命いたしましてからこの六月までの一年弱に亘り、このサミットの準備にあたって参りました。伊勢志摩サミット準備事務局という部署は実は、先週末には解散になっているのですが、最初の段階ではスタッフ十人ぐらいから始まり、私はちょうど十番目ぐらいの着任でしたけれども、サミット直前には約

三〇〇名で準備にあたって参りました。

その中で私の担当業務は広報担当の次長ということで、第一に、サミットに向けての事前広報、これは国内向けの広報もございますし、外国の記者に向けた広報といったこともございました。簡単にご紹介しますと、例えば国内向けでしたら、様々なホームページあるいは最近流行りのフェイスブックやツイッターにおいてサミットの情報を出していく。あるいは、サミットを盛り上げる様々な行事を東京や三重で開催させていただくとか、ちょっと風変わりなところでは、サミットの記念切手も今年出しています。三重県の取組で、地元出身の歌手の平井堅さんに、公認サポーターに就任されたことを受け、いろいろな催し物に出ていただいたこともありました。第二に、サミットの当日の広報展示も私の主要業務の一つでして、ここ伊勢市のサンアリーナにできました国際メディアセンター（ＩＭＣ）に設置させていただきました。メディアセンターでは外国の記者さんを含め約四〇〇〇名から五〇〇〇名をお迎えした訳ですが、その中で、主に記者さん向けの広報を行った訳です。テレビ等で御覧になった方もいらっしゃるかも知れませんが、広報展示スペースにおいて日本の技術ですとか、伝統、あるいは三重県の素晴らしい見所を紹介させていただいたのですが、その責任者として準備にあたって参りました。

また、広報以外にも、首脳の伊勢神宮訪問の行事も担当させていただきまして、神宮さま（神宮司廳）とは度々打ち合わせをさせていただきました。そういう訳で、宇治山田駅から伊勢神宮の方には何回も向かった訳ですが、皇學館大学さんの看板はいつもちゃんと拝見してはいたのですが、今回初めて、角を左折してお伺いしたということで、非常に綺麗なキャンパスを遂に見ることが出来て、嬉しく思っております。

それと、首脳周りの広報にも関わらせていただき、伊勢神宮に首脳が来られた際に、ＮＨＫさんのご協力も得て、近く本格的に試験放送が始まる日本の最先端の技術である８Ｋテレビを伊勢神宮の待合室に置かせていただいて、首

脳に御覧いただくことも私が担当させていただきました。

また、もう一つ、首脳の皆様に同じく日本の先端技術を見ていただくため、賢島の首脳会場において、首脳の方々に自動走行車や燃料電池車（ＦＣＶ）に乗っていただく行事を担当させていただきました。

このように、私は、担当している物理的な場所が、サンアリーナ、伊勢神宮、賢島と、ほぼ三つ裂き状態で、サミットの直前から当日も常に車で移動して回って、というような状態でした。振り返ってみますと、三重県にはここ伊勢を含め、大体十数回ぐらい出張で来させていただいて、サミットが終わった後もこの伊勢市には滞在し、後で申し上げますが、国際メディアセンターの、住民の皆さんあるいは学生の皆さんへの開放デーがありまして、それに六月十日まで御付き合いさせていただきました。という訳で私、通算してこの伊勢市に一ヶ月か二ヶ月くらいいたのではないかということで、もはや実質的な伊勢市民ではないかと思っていますし、おそらく伊勢市を後にした最後のサミット担当者だろうと思っている次第です。というほどですので、ドラマ「あまちゃん」が終わった後の「あまロス」ではないですが、私は今「サミロス」の最中にあります。サミットが終わって最初の頃は、「今日サミットの行事が何かあったような気がする」という夢を六月十日頃まで見ることがありました。そういう時分に、ちょうど今回の講演のお話をいただきまして、ここ皇學館でお話しさせていただくことになったのも何かのご縁かなと思いますし、私の「サミロス」対策としても今回非常に有り難いオファーであったなと思います。そういうことで、私にとってこの一年間、一生懸命させていただいたサミットの準備という仕事の、ある意味では卒業論文の発表のような機会だと捉えさせていただいております。本日の講演は「伊勢志摩サミットについて」ということで、サミットとは何だったのかという話やサミットの裏話を、との注文をいただいております。裏話となりますと、職業柄どこまで言えるかわかりませんが、なるべくベストを尽くしたいと思います。

二

サミットとは一体なんであったのか、という話から始めたいと思いますが、特に皆さんにとってサミットとはどういうものであったのか、なんとなく始まって、気付くともうやっていて、次の瞬間にはもう終わっていた、私も伊勢志摩に残っていろいろな方からお話を伺ったのですが、そういう印象を持った方が多かったのではないかと思います。サミットが来るということで去年からもちろん盛り上がっていて、テレビや新聞、メディアでもかなり取り上げられました。伊勢志摩でもそうだったと思いますし、実は東京でも一か月前からサミット、サミットということで、どのチャンネルでも伊勢志摩を特集するような、各国の首脳を紹介するようなニュースやテレビ番組が日々流れていました。あるいはご覧になった方も多いかと思いますが、サミット効果でしょうか、「ブラタモリ」という番組が三週連続で伊勢志摩を特集しましたし、他のいろいろなチャンネルでも取り上げられました。

しかし、それだけではサミットがいったい何だったのか、と玉ねぎの皮のようにむいていくと、はて何だったのかしらと家族の中で話をされた方もいらっしゃるかもしれません。お子さんを対象にこの二週間ほど、アフターサミットという行事で話をさせていただいたのですが、何を覚えていますかと聞くと、特に伊勢市の子どもたちは、例えば伊勢神宮での訪問行事に旗を振って参加していたお子さんがいらっしゃったり、実際に首脳の車を見たお子さんもたくさんいらっしゃいました。県内の他の地方のお子さんに話を伺うと、テレビで見たとか、車がたくさん走っていたとか、いろいろな都道府県のおまわりさんがいたことを一番におっしゃるお子さんが多くて、四十七都道府県全部の警察車両を見られるのではないかとチェックをつけていた人もいたようですけれども、そういった印象の方も多いの

ではないかと思います。ここはぜひ、サミットにおいて、皆さんのこのふるさとにおいて、実際に何が行われたのかを簡単にご紹介したいと思います。

何回かサミットに携わらせていただき、さらに今回伊勢志摩サミットに深く関わらせていただいた経験を踏まえて、私なりにサミットとは何かということをいくつか挙げてみたいと思います。一つは、首脳同士の関係構築、関係維持の場としてのサミット。二つ目が、国際問題を解決に導く場としてのサミット。もう一つは、議長国の政策や狙い、更には国や地元の魅力をＰＲする場としてのサミット。こうしたいくつかの要素があろうかと思います。今日は、この三つの柱に沿って簡単にご紹介させていただきます。

三

最初に、国同士・首脳同士の関係を構築・維持する場としてのサミットという観点を紹介いたします。皆さん賢島のベイスイートの屋上で首脳同士が歩いているところをテレビでご覧になられたと思います。この画が他の外交のいろいろな会議などのそれと比べて何が異なるかというと、まず①首脳しか写っていません。②座っている訳ではなく、歩いています。③首脳同士で直接会話をしています。こうしたことは外交の場面では、実はかなり特別ではないかと思います。通常であれば、例えばどこかの首脳が日本に来られたとすると、だいたい会議の長机に一列に座って、役人も座って、仰々しくやるものですが、サミットでは少し違ったことが実は行われているという話をこの後紹介させていただきます。

サミットがそもそもいつ始まったかというと、一九七五年、パリ郊外ランブイエ城という所で、第一回が行われま

した。何故始まったかというと、当時一番の喫緊の課題であったオイルショックに端を発する経済危機、世界的な経済不況にどのように世界として立ち回っていくべきか、特に主要国の間で政策を協調して臨むべきではないかという機運が高まって、七五年に第一回サミットが開かれました。それ以降毎年行われてきまして、そういう経緯もあって当初は経済問題が中心でしたが、冷戦という状況の中で、政治問題、国際問題等、様々なテーマが増えてきましたし、九〇年代あるいは二〇〇〇年代に入ると、地球規模の問題、例えば環境問題、温暖化ガスの話ですとか、難民の話、テロの話といった、地球規模の問題も扱うようになりました。

サミットの経緯やテーマはそういうことですが、何がサミットの特色かと言うと、この「サミット」という言葉に多少のヒントがありまして、簡単な英語ですけれども、もともとの意味は「山の頂上」という意味です。その名前から明らかな通り、政府の頂上、つまりその首脳たる大統領なり首相が、直接議論するというのがサミットの醍醐味であります。大統領や首相がまさにファーストネームでお互いを呼んで話をするというのが、やはりサミットの特色かなというふうに考えます。そして、もちろん各国の役人が用意した文書を読むことも会議ではあるにはありますが、かなりの部分、大統領や首相が自らの言葉で話すという場面があります。それともう一つ大事なのは、距離感ですね。実際に首脳が座られた机を国際メディアセンターで事後的に公開させていただいたのですが、大体直径三メートルくらいの円卓なのです。その距離で主要国の首脳が本当につばが飛ぶか飛ばないかぐらいの距離で直接議論し合うというのが、やっぱりサミットの特徴なのかなと考えます。

そしてまた、この首脳同士の関係、信頼関係を維持していくこともサミットの重要なポイントになっています。今年初めていらした首脳がいらっしゃいます。カナダです。トルドーさんが最近新しくカナダの首相になられましたので、彼が唯一、今回初参加です。ですから、新しい首脳もいる輪の中で、信頼関係をいかに作っていくかということ

が重要ですし、多分カナダのトルドーさんにとっては、ある意味外交のデビュー戦の一つで、どうやって彼自身がプレゼン、世界にＰＲしていくか、大事な場であったのではないでしょうか。

そしてまた、大事なことは、サミットがこれからも続いていくこと、続けていくことだと思っています。サミットは一九七五年に始まって毎年行われてきています。来年サミットをどこでやるかご存じでしょうか。そうですね、来年はイタリアですね。ですので、まさに来年はイタリアで、同じようにサミットが開催されます。ちなみに場所はシチリア島で行われます。非常に風光明媚なところで、ある意味で伊勢志摩と似ている、海がきれいで、空がきれいで、お魚がおいしい、という場所かなと思います。そのように、サミットというのは、これは私の勝手な表現なのですが、ある意味リレーみたいなもので、議長国から議長国にバトンを渡して、次の議長国、はい、イタリアさん、というように連綿とつないできたのがサミットなのかなと思います。

四

次は、国際問題を解決に導く場としてのサミットというお話をさせていただきます。先ほどご紹介した直径三メートルぐらいの机で首脳同士で何を議論するか、なぜ議論するか、ということをご紹介したいと思います。

まず、今世界に一九六も国がある中で、世界をどうしていくかを決めるのは簡単ではありません。今日はこちら皇學館にお邪魔していますが、ある意味、世界は一九六人の学校みたいなものですね。その学校で、どう物事を決めていくか。例えば、文化祭で何を出し物にするか。焼きそばを焼くのか、お好み焼きを焼くのか。何をやるのか決めるのは中々簡単ではありません。一九六の人でも大変な中で、一九六の国が、世界の共通の課題をどう解決していくか

議論するのはそう簡単ではありません。その中で特に大事なのは、世界全体で問題解決に向けて努力するということと、そのためのルールを作っていくということになります。

そこで、外交の世界では伝統的にいくつかのやり方があって、一つは、二国間関係と呼ばれるもので、例えば日米首脳会談、今回もありましたけれども、そういった二国間の関係を構築して、いろいろな問題を解決していくというのが一つのやり方。もう一つは、国連に代表されるような、全員参加型の解決を目指すという、二つのやり方があろうかと思います。ただし、この二つだけではなかなか難しいところもあります。国連では、二百もの声がある分、やはりなかなかまとまらないということがありますし、安保理常任理事国というグループ分けがあっても、意思決定の上で難しい局面があります。そんな中で、サミットのユニークさということなのですが、そうした二国間だったり、全員参加型の議論と並行して、まずは同じような考えを持っている、つまり、同じような価値観だったり、同じような国の仕組みを持っている主要な国の間で、まずは議論をして、世界の共通課題の解決に向けて、どう自分たちが主導的に取り組むか、あるいは世界に訴えていくか、ということをこのグループの中で議論しようというのが、サミットの位置付けではないかと考えます。そう言いますと、あの国が参加していない、この国が参加してないじゃないか、というようなことをおっしゃる方もいらっしゃいますが、私がいつも申し上げているのは、そういった国々を入れた会議も、そういった場もあります。ただ、サミットのユニークさは何かというと、まずは民主主義だったり、あるいは法の支配だったり、そういった共通の価値観を保有する国の間でまず議論していく、というのがサミットの意義なのではないかなと。

では実際に、今回具体的に伊勢志摩サミットで何が議論されたかということですが、安倍総理がサミットの最後で議長として行った記者会見で紹介のあった今回の総括も踏まえ、今回特に議論に上がった点を簡単に紹介させていた

だければと思います。

まず総論の話として、Ｇ７の価値、結束、そして世界経済を取り上げ、先ほど申し上げましたように、サミットに来るＧ７の、国としての決意と言いますか、世界の様々な問題に対応していくとの決意を確認したことが一つ。また、世界経済については、近年続いている不安定な経済状況の中で、Ｇ７各国の政策をいかに擦り合わせていくかが議論されましたし、また、今振り返ってみると、いずれも発表文書にもありますのでぜひ見ていただければと思いますが、首脳文書の中で、イギリスのＥＵ離脱が世界経済の成長に対するリスクになり得るというような内容も実は入っていたりします。また、貿易では、世界全ての国で貿易のあり方を決めようというＷＴＯでの動きと、それに加えての、ＴＰＰなどに代表される、一部の国で更に追加的にルールを作りましょうという取り組みの双方を頑張っていくことが確認されました。

その他、政治や外交では、例えばテロの個別の事案に対する短期的な対応と、より中長期的にはテロの根っこをいかに根絶していくかという取り組みの重要性が確認されました。あるいは、特にヨーロッパの国にとって死活問題となっている難民問題についても、今来る難民をどうするかだけではなく、難民の大元にある問題をどう解決するかの議論がなされました。その他、北朝鮮の話や、もちろん拉致の話も議論がなされましたし、あるいはロシアへの対応、ウクライナをどう支援していくかという話、また海洋安全保障ということで、世界の様々な海において、一方的な手法による様々な動きがありますので、それにどう対処していくか、かかる動きに対しては法に則った対応が必要ですねということが確認されました。

また、今回のサミットのひとつの重要な位置付けでもあるのですが、気候変動については今年、ＣＯＰ21という地球温暖化の対策を語り合う会議があり、そこで今後各国がどう対応していくかについてパリ協定という文書が出た訳

ですが、今回の伊勢志摩サミットはそのＣＯＰ21が終わって最初のサミットということから非常に重要だった訳で、Ｇ７各国自身がこのＣＯＰ21の成果を率先して実施していくことが確認されました。

他にも、アジアの安定と繁栄ですとか、あるいは私が今まさにやっている仕事ですけれども、アフリカの開発をどうしていくかという議論もなされた次第です。

五

次に、議長国の政策やねらい、更には議長国や地元の魅力をＰＲする場としてのサミットというテーマでお話をさせていただこうと思います。

実はＧ７、まだやっているのですね。伊勢志摩サミットという行事は終わりましたが、Ｇ７のプロセスはまだ続いています。どういうことかと言うと、Ｇ７というのは一年間通してのプロセスなのです。日本が一月から議長国を務めて十二月三十一日までが日本の議長国、前回の議長国はドイツでしたので、ドイツから引き継いで、今年が日本、今度はイタリアが引き継ぐことになっています。そして、伊勢志摩でのサミットだけではなく、十の閣僚会合が今年日本で開かれる予定となっていて、その内すでに八つが行われています。その一つ、テレビでご覧になったかもしれませんが、広島でＧ７外相会合が開かれました。ケリー国務長官がオバマ大統領よりも一足先に原爆ドームを御覧になっていますが、あの時のＧ７外相会合です。今年まだこれから行われるものとしては、九月に神戸において保健大臣会合が、また、軽井沢で交通大臣会合が開催されます。Ｇ７サミットというと、我々はとかく首脳会合の賑やかな二日間を意識しがちですが、実は一年間続くプロセスとなっています。

それで、その一年間続く議長国としての意義ですが、先ほど申し上げましたように、サミットの議題にはある程度継続性があり、一回目がそうであったように、経済問題が一つですし、先ほど申し上げた北朝鮮とかウクライナのような国際情勢、そして環境問題を始めとする世界共通の話題というのも近年ではかなり多く議論されています。議長国というのは、そうした議題がある中で、こういった分野を重点的に、または追加的に、取り上げたいということにつき、G7の中である程度リードしていける。勿論みんなで合意した上ですが、こういうテーマを特にやりたいという濃淡を一定程度つけることができるのかなと思います。例えば今年のテーマの中では、「質の高いインフラ」という概念があります。質の高いインフラとは何かといいますと、外国を支援して何かプロジェクトをやって、鉄道を敷くとか、水道網を整備するという時に、安かろう悪かろうではなくて、より中長期的に見て、メンテナンスが簡単であるとか、地元の人に技術も伝承しつつやっていくとか、そういった意味で中長期的に、より地元のためになるような、結果としてより安くつくようなインフラ。それを我々は「質の高いインフラ」と呼んでいますが、今回日本は議長国としてサミットでこれを議論したいと主張し、実際に伊勢志摩で議論され、「質の高いインフラ」に関する文書も出されました。このように、議長国はG7の中で、どういうテーマをやるかという際にかなり議論を引っ張っていけるというのが、重要なポイントかなと思います。ただしその一方で、その表裏になりますが、勿論サミットは毎年どの国で開催した時も等しく重要ではありますが、特に議長国の時には議長国としての各分野での覚悟・取り組みがクローズアップされやすいということはあろうかと思います。今回、議長国である日本は、かなり多くの分野で、様々な分野にどう対応していくかというイニシアティブに言及しました。例えば、先ほど申し上げたインフラの分野では、五年間で二千億ドルの質の高いインフラに投資をしていくことを世界に対して発表しました。

六

もう一つ、よりイメージしやすい話になっていきますが、そういった、議長国としての日本が推進したい政策を推せるということと併せ、自国をＰＲする非常によい機会となるのがサミットです。と言いますのも、外国からプレスが今回一〇〇〇人くらい、日本国内から三～四〇〇〇人のプレスと合わせて五〇〇〇人くらいでしょうか、プレスが集結しました。そういう時なので、日本の魅力や様々な技術だったり、あるいはまさに日本の今の姿を世界に見ていただくこれとない機会です。実際、安倍総理が去年夏、サミット開催地を伊勢志摩に決定された際に、日本の美しい自然、豊かな文化・伝統を世界のリーダーに肌で感じてもらえる、味わってもらえる場所であるということで、伊勢志摩を選ばれたという趣旨を述べておられます。それを踏まえて、勿論会議そのものがうまくいくよう議長国として尽力しましたが、我々としては是非この日本、そしてこの伊勢志摩も知ってもらいたいということで、様々な形で各国首脳自身に実際に地元を経験していただきました。まさにすぐそこにある伊勢神宮からサミットの日程が始まった。いわゆる歓迎式典として、伊勢神宮の宇治橋の袂で安倍総理が各国首脳を出迎えてサミットが始まったように、まさに地元を知ってもらうということが一つ。その他にもう一つ、おもてなしの心、ということで、例えば首脳の方々にお楽しみいただく食事や贈呈品、あるいはファーストレディの皆様にも別途このサミットを楽しんでいただけるように準備をしてきました。

中でも、かなりニュースやワイドショーでもやっていたのでご覧になった方も多いと思いますが、サミットでは食事が一つの華といいますか、話題となるところです。今回、首脳が食事をする機会が三回あり、皆様にも今日これら

食事のご用意を、と言いたいところですが、なかなかそうもいきませんので、サミットと食とについて、その話をさせていただきます。

皆さんの中には、例えば二〇〇〇年の九州・沖縄サミットの食事で、安室奈美恵さんが歌を歌われ、クリントン大統領らが聞いておられるシーンを覚えている方もいらっしゃるかもしれません。その二〇〇〇年頃までのサミットは二日間ではなく三日間ということが比較的多くて、かつ、食事も晩餐会というような社交行事の度合いの高めのものも多かったようです。それから比べると、近年のサミットは多少変化している所もあるのかなと思います。実際に、最近のサミットはすべて二日間の開催です。

また、ここ数年の傾向を見ていますと、晩餐会形式と申しますか、ご飯を食べるためにご飯を食べる機会は実はございません。今年のサミットも三回の食事の場があると申しましたが、すべてワーキングランチ、ワーキングディナーと呼ばれるものです。単に食べるのではなく書類もちゃんと置いて、議論しながらご飯を食べましょうと。一見、美味しく食べられないような雰囲気ですけれども、食べやすいようにしながら、議論できるようにサーブしないといけないというのが、ここ近年のサミットで食に求められている要件と伺っています。

そのような中でも、先ほど申し上げた通り、せっかく地元を知ってもらうチャンスでもあります。なるべく多くの伊勢志摩・三重県・東海地方の食材を使っていただくべく、苦心して準備にあたりました。例えば、「伊勢海老クリームスープ・カプチーノ仕立て」というのがあり、残念ながら私は食べたことがないのですが、非常に美味しかったとのことです。報道を見ますと、ワーキングの形式ではありましたが、最後に料理人の方が呼ばれて、安倍総理からご紹介いただいて、非常に美味しかったということで、まさに食の本場であるフランスのオランド大統領からも絶賛をいただいたそうです。ドイツのメルケル首相も絶賛されていたと伺っています。ワーキング形式になったとはいえ、

やはり「食」や「おもてなし」がサミットの重要な一部であることは引き続き変わりありません。

贈呈品も重要なおもてなしの一部となります。例えば、G7の各国首脳は皆さん首脳であることを示すピンバッジをされていたのですが、これは三重県の真珠を使ったラベルピンにいたしました。あるいはファーストレディの皆様への贈呈品として、ミキモトのネックレスが選ばれました。それから、新聞等でご覧になった方もいらっしゃるかもしれませんが、サミットバッグというものをご用意させていただきました。これは、お越しになる記者の方々、各国の代表団にお配りした、色々な書類を入れて持ち帰れるようなバッグなのですが、その中には伊賀組紐、三重の地酒、三重県のお猪口などを入れさせていただきました。こういったことは、日本だけでなく他の国が議長の時も行われています。ドイツも去年、代表団向けに、大きな一メートルくらいのリュックを全員に配っていて、開けてみると、ワインボトルまで入っていたそうです。日本は日本で、きめ細やかなおもてなしの心で、食ですとか、贈呈品も対応させていただきました。こういったおもてなしについては各国から非常に評判が良かったと伺っています。サミットと言うと、会議の方にばかり焦点が当てられがちですが、こういったおもてなしも重要な部分となります。

この関連を終える前に一つ申し上げると、まさに、そのおもてなしという意味では、伊勢神宮を各国首脳が訪問されたのはある意味、最高のおもてなしの一つであったと感じました。各国首脳とも伊勢神宮への訪問に感銘を受けた旨報じられています。これも、今申し上げたおもてなしの成果であったと言えるのではないでしょうか。

七

続いて、今回のサミットの機会における発信について紹介させていただきます。

私は特に広報を担当していましたので、我々の企画したサミットが、どう世界の目にうつるのかは気になるところでした。もちろん、サミットそのものも広く世界で報じられました。例えば、開催期間中にイギリスのＢＢＣなど見ていますと、基本的に、ニュースはすべてIse-Shima発で、オバマ大統領が何を言ったとか、キャメロン首相が何を言ったといった形で、生放送を含め、かなりこの地から発信されたわけです。

ただ、広報担当として重視しましたのは、そうした通常の報道に加えて、日本の魅力・伝統あるいは技術、さらには伊勢志摩・三重県についてのいろいろな情報発信を行い、ぜひ世界の人に見ていただきたいと頑張ってきたわけです。

今回、メディアセンターで展示をさせていただきましたが、二つのテーマを設けました。一つは「伝統と革新」。もう一つは「世界の共通課題に応える日本」、あるいは「日本の処方箋」と私たちは呼んでいました。この二つのテーマで今回、展示を行いました。

展示を通じ何をしたかったかといえば、まさに日本のありのままの姿、今日の日本の我々がやろうとしていることを世界の人々に知ってもらいたい。それは、来られる外国の記者に見ていただきたいのもありますが、外国の記者を介して世界に発信してほしいということで、今回、展示を行なってきました。また、期間中はファーストレディの皆様や、ＩＭＦ（国際通貨基金）のクリスティーヌ・ラガルド専務理事といった方々がＩＭＣにお見えにになって、私もご案内させていただく機会を得ました。そこで展示をご覧になったり、たとえば伊勢茶を召し上がる、その訪問の

様子を内外のメディアが取材をすることで、日本のＰＲにもなりました。

そのために、我々としては、いかにもお役所な展示ブースを設けたり、パンフレットをたくさん配布するのではなく、なるべくテーマを決めて、よりわかりやすく、かつ、時間のない外国の記者の皆さんにすぐに理解してもらいやすいような展示をしたいということで、先ほど挙げた二つのテーマで展示をしました。

そこに込めた思いをご紹介しますと、一つ目のテーマの「伝統と革新」ですが、日本においてそれらは独立した概念ではなくて、伝統が根底にあって、その上に革新、といいますか、新しいものが乗っている。私はよく例として二つ挙げさせていただいたのですが、まずは、伊勢神宮。伊勢神宮には長きにわたる歴史がありますが、その歴史の中で、式年遷宮を二十年に一回行ってきたということで、伝統を守りつつも、その中で、常に新しいものを取り入れていく。この伊勢神宮の常若の精神はまさにそういう考えを表しているのではないでしょうか。

あるいは、三重県をはじめ、東海地方は、昔からものづくりの面で日本の中心を担ってこられました。例えば今回、湯飲みを置くと走り出し、お客さんの所まで行って、お客さんが湯飲みを持ち上げると止まり、戻っていく「からくり人形」を展示したのですが、これは二百年前の日本に既にあった技術だそうです。今は、三重県の展示でも案内していた「ペッパー君」をはじめ、ロボットの時代ですが、二百年前からある種の「ロボット」を作っていた。そして、今もその同じ中部地方において、たとえばトヨタやホンダなど様々な企業が新しい車やロボットを作っておられるということを、世界の人にアピールしたかったということがあります。

もう一つのテーマ「世界の共通課題に答える日本」ですが、その趣旨は、例えば高齢化問題、あるいは経済のデフレなど、世界に様々な問題がありますが、実は、日本が先んじてといいますか、たまたまなのかもしれませんが、日本が直面している問題を、その後に世界がまた同じように直面することが結構あろうかと思います。特に高齢化社会

については、日本が一番速いスピードで、大きな規模で直面しているともいわれています。

そういった世界共通の課題、あるいは日本が先んじて直面している様々な問題に対して日本がどう応えていくかについて、ぜひ紹介したいと考えました。そして、日本が、いろいろな工夫と知恵を使ってそれら問題に対応していることも是非アピールをしたい。たとえばロボットであれば、単にかわいいロボットを紹介するのではなくて、いかにそのロボットを使って社会が直面する問題を解決していくかということを紹介したい。高齢者を持ち上げるのをアシストしてくれる介護ロボットや、より簡単に動かしやすい車いすなど、今回そういったものを展示しました。実際に、ファーストレディの皆様やＩＭＦのラガルド専務理事にも見ていただき、直に触れて体験していただきました。そういったことを、今回展示でさせていただきました。

こうした取組の結果として、たとえば米国のテレビ局のブルームバーグ（といったところの海外メディア）がまさにこの国際メディアセンター（ＩＭＣ）の展示スペースの場所を使って中継をしてくれている。基本的にはサミットのニュースをやっているわけですが、まさにこの展示スペースを映しながら世界に発信をしてくれました。

また、日・欧・米のＧ７の国のメディアの方々ももちろん多くいらっしゃいましたが、中国、ベトナム、インド、さらに遠くはウガンダ、ガーナの記者までお越しになって、サミットをフォローするとともに、こういった様々な日本の魅力について発信してくれました。

それから今回、洞爺湖までの日本の経験とは多少異なる点があったと感じたのが、ＳＮＳです。若い方はもちろんご存じですが、フェイスブック、ツイッター、インスタグラムといった、ソーシャルネットワークサービスと総称される即時性の高い、簡単に情報発信ができるツールが今日の世界のコミュニケーションで中心的な役割を担っています。

八年前の洞爺湖に比べてみると、サミットにおけるＳＮＳの活用が断然多くなったと実感として感じます。ツイッ

ターであれば、例えば外国の記者さんが、いままさに〇〇について議論が行われていますと速報がてらつぶやいたり、展示を見て「こんな面白いものを見たよ！」といったことを、写真とともに簡単にアップできるわけです。ツイッターで「G7 Summit」という言葉やハッシュタグ（小見出し）を検索してみると、数え切れないほどの記事が表示されます。あるいは、「Ise-Shima」でもかなりの記事が表示されます。つまり、今のメディアにおいては、単に記事が新聞に出る、テレビに出るだけでなく、その途中段階として、記者の皆さんがいろいろなことをＳＮＳを使ってネット上でつぶやいています。

他にも、先ほど申し上げたサミットバッグについて、「サミットバッグでこんなものをもらったよ」というのを、実際にワシントンポストの記者がツイッターでつぶやいて、中身の写真とともに拡散してくれました。そのツイートを何千人、何万人の人が見るということで、新しいメディアに応じた、新しい情報の拡散があるのだな、と再認識しました。そうした傾向は事前に分かっていたので、新しいメディアのあり方への対応を意識して、今回頑張ってフェイスブックやツイッターでの情報発信を心掛けた次第です。

八

ここまで、サミットの結果がどうであったかという話を申し上げてきましたが、最後に、せっかく皆様の故郷でサミットが開催されたということで、これが今後、三重県の皆様、特に若い方にとって、どういう意味を持ち得るか、持ってほしいと思っているかについて、あくまで私見ですが申し上げたいと思います。

サミットは一九七五年から始まって、日本では今回で六回目の開催です。東京で最初の三回が開催されて、九州沖

縄があって、洞爺湖があって、今回三重県、ここ伊勢志摩で行われた。ということで、東京以外で行われたのはまだ三回目となります。かたやサミットは七年に一回、ロシアがいたころは八年に一回でしたが、七年に一回と仮定します。そして、日本の都道府県、決まりがあるわけではないのですが、開催地候補として全て等しい立場にあるということで、四十七都道府県で持ち回りをすると仮定します。

そうすると、あくまで計算上の話でしかありませんが、三重県が次にサミットを開催するのは三五〇年後となります。私もぜひ長生きしたいと思いますが、中々三五〇年後どうなっているか分かりません。つまり、サミットが東京以外の場所で行われたというのは希少価値のあることですし、巡り合わせと言えばそれまでですが、皆さんの故郷でサミットが開催されたことは、それだけ非常に貴重な経験・機会であったと思っていただけると嬉しく思います。

こうした経験をぜひ一過性のものではなく、サミットとは何であったかと知っていただき、更にはこれを契機に、いろいろと世界の動きについて考えるきっかけとしてほしいと思います。サミットの事前広報では、特に若い世代にこの点をご理解いただくのが重要であろうということでやってきました。「一からわかるサミット塾」を開催し、三重県の小中高に外務省の職員を派遣して、まさにサミットとは何かという話や、サミットってどういった人が来るのだろうといった話や、外交ってなんだろうという話をさせていただきました。ちょうどサミット直前の四月ぐらいまで、三重県下の二十七校で四七〇〇人の子どもたちを対象にこういった出前授業をさせていただきました。あるいは、最初申し上げたように、国際メディアセンターを六月十日まで部分開放し、そちらにも全体で四二〇〇人、その内の二二〇〇人くらいは三重県の小中高の皆さんにお越しいただきました。我々としては、せっかくのサミットをきっかけに、若い世代を中心に、世界で何が起きているかを改めて考える良い機会にしてほしい。そしてまた、我々の日々の生活が世界と繋がっているという、実は簡単なことを我々は忘れがちですが、それに思いを巡らしてほしい

と思ってまいりました。

例えば、ここ三重県伊勢市にずっと住んでいたとしても、我々の買うものは輸入品だったりするかもしれない。あるいは我々のお父さんお母さん、ご近所さんの作っているものは海外に輸出されるものかもしれない。あるいは我々の買うバターの値段は世界の需要によって変わってくる。ガソリンの値段も同じように変わってくる。つまりは、我々の生活が図らずも世界と繋がっていることを改めて認識してほしいと考えました。

特に本日、若い人たちにアピールしたいのは、そんな世界の中で、自分が何をできるかということを考えるきっかけにしてほしいということです。外国に行くこと、外国で仕事をすることも一つでしょう。しかし、必ずしも外国に行くことだけが世界に貢献する方法ではなく、例えば英語を学ぶのも一つの入り口かもしれません。あるいはここ伊勢志摩、三重県にたくさんの外国の方に来ていただく、これも世界と繋がる一つの方法だと思います。サミット後に実際にいろいろタクシーの運転手さんに聞いてみると、確かに人が増えている感じがする、特に欧米の人が増えてきたという印象を述べておられました。あるいは例えば、お子さんによっては、僕はサッカー選手になってドイツでプレーしたい、野球でアメリカに行きたいという子もいるかもしれません。このように、外国に行く行かないを問わず様々な形で世界と繋がることができるし、誰もが何かしら貢献できるのではないか、ということを考えるきっかけに今回のサミットをしていただけると本望だなと思っています。

最後に一言だけ私自身の勤め先のＰＲをいたします。世界に繋がる方法はいくらでもあると申し上げたばかりで恐縮ですが、特に学生の方におかれましては、外務省で務めるというのが世界と繋がる一番有効な手段ではないかと思う次第です。三重県から外務省に来られた方、結構おられます。私の同期にも津高校出身の者がおりますし、高田高校出身の先輩で課長をしている者もおります。外務省は三重県から遠い所では決してありません。ぜひ外務省を就職

先として考えていただき、三重県から多くの方が外務省に来られることを期待しています。

まとめになりますが、サミットをきっかけにぜひ世界を身近に感じていただき、そしてまた何ができるかを今一度考えるきっかけにしていただけるありがたく存じます。私も、サミットをきっかけに三重県とご縁ができましたので、もう十五回くらい来ていますし、実質的には伊勢市民だと思ってはいますが、三重県の事を一層学び、今後も深く関わっていきたいと思います。これにて一度マイクを置きますが、この後はざっくばらんに質疑応答に入らせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

〈以下、質疑応答での主なやりとり（詳細略）〉

・今回のサミットの具体的成果

・各国首脳の人となり

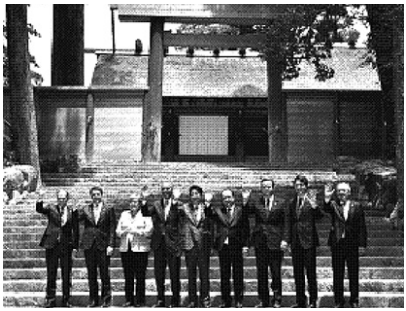
・サミットの警備体制

・サミットで日本の情報発信を行う意義、外国語での発信で心がける点

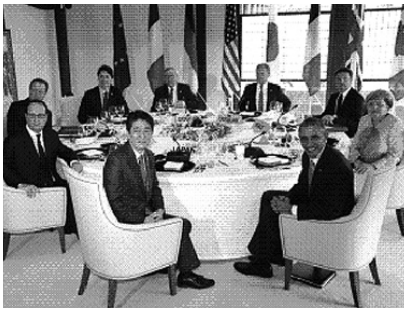
・Ｇ７首脳による伊勢神宮訪問行事の概要

・Ｇ７首脳の三重県の食材に対する評価

（参考）サミットの各種成果文書や、各行事の模様については、Ｇ７伊勢志摩サミット公式ＨＰ（http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/summit/ise-shima16/）もご参照ください。



伊勢神宮訪問の模様（外務省HP）

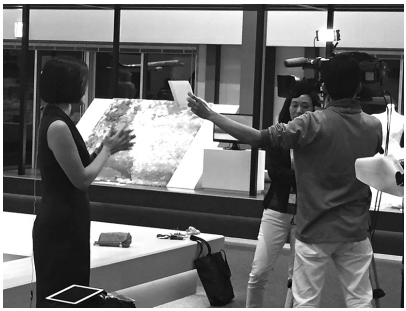


首脳会合の模様（外務省HP）

初日のワーキングディナー（外務省HP）

初日のワーキングランチ（外務省HP）

メディアセンター内の展示スペース
（筆者提供）



展示スペースでの海外メディア取材
（筆者提供）

IMF専務理事の展示スペース訪問
（筆者提供）

アフターサミットで説明を聞く三重県の小学生
（筆者提供）

三重県製作のカウントダウンボード
（筆者提供）

（もり　かずや・外務省第六回アフリカ開発会議事務局次長）